
背びれの欠けた金魚

上田不伝

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

背びれの欠けた金魚

【Nコード】

N5342Q

【作者名】

上田不伝

【あらすじ】

夏休みの真ただ中、？僕？のもとに懐かしい友人がやってきた。

目を覚ました瞬間に絡みつくような暑さを感じた。

夏なのだ。僕にとってはこれで十二度目の夏。

ベッドに寝転んだまま片手で窓を開ける。8月のムンムンとした風が流れ込んで、水色のカーテンを少しだけ膨らませた。同時に近くにある群生地から蓮の匂いが漂ってくる。鼻腔を刺激するあまり好きになれない風だ。しかも、ちっとも涼しくない。

時計は一時を十分ほど回っていた。確か早起きしすぎて昼ごはんの前に眠たくなって、そのままベッドに入ってしまったんだっけ。

「クーラーつけよう……」

額から滲み出てくる汗を拭って起き上がる。それでも一苦労だった。

リモコンを取り、スイッチを押す。ピピッ、と無機的な音がしてすぐに心地良い風が流れ込んでくる。古いエアコンだからなのかカタカタと変な音がするけれど、朝から騒ぎっぱなしの蝉たちに比べたらちっとも耳障りではない。僕は窓を閉めた。

「ん？」

蝉の声と一緒に、何か別の音まで遮断されたような気がした。

「——い——クオー——」

「……」

窓と網戸を開けてベランダに降りる。直射日光が眩しくてすぐには目が開けられなかった。

「おーい。リクオー——」

細目で下を眺めると、見覚えのある顔が一つ。満面の笑顔で手を振っていた。

「ソウヘイ君……」

幼稚園のときから知っている僕の数少ない友達。昔は一緒に山や

川でわけもなくはしゃいだり、お互いの家でゲームをしたりしていたけれど、学年が上がるに連れて特に接する機会も無くなっていった友達。そのソウヘイ君が、僕の家の前で僕の名前を呼んでいた。

「遊ぼうぜー！」

なんだかよく分からないけれど、たまには旧友と遊んで昔を懐かしもうとか、そういった気分なんだろうか。

僕は急いで家の中に戻り、階段を駆け降りた。そしてパジャマのままだったことに気付いて部屋に戻った。着替えを済ませてまた階段を駆け降りる。ソウヘイ君から声を掛けられるのも2年ぶりくらいじゃなかったかな——とか、そんなことを思いながら。

焙られるような炎天の下で、僕らは久しぶりに顔を合わせた。

「ソウヘイ君、久しぶりだね」

「おう。なんだリクオ、ちょっと痩せたんじゃないの？」

「ん。そうかな。まあ夏だし、食欲出ないしね」

僕にはソウヘイ君の方こそ細くなったように見えただけだけど、元々が痩せぎすで生白い僕と違って不健康そうな印象は受けない。

「それで、あの、その子はもしかして……」

ソウヘイ君の後ろでそっぽを向いている女の子に視線を向ける。

「エイコちゃん？」

「……」

女の子はただ黙ってソウヘイ君に寄り添っているだけだったけれど、苦笑いで頷くソウヘイ君を見るに、恐らく間違っていないのだろう。

エイコちゃんはソウヘイ君の二つ下の妹であり、またソウヘイ君と同じように、僕の古い遊び仲間でもあった。昔もたまに、こうして兄妹一緒に僕の家に来て遊んでいた。

とにかくゲームが大好きな女の子だった。うちで格闘ゲームなんかをやったときには決まって僕とソウヘイ君が先にギブアップしていたことをよく覚えている。

いま目の前にいる女の子は、僕のそんな思い出の中にあるエイコ

ちゃんの容姿とはすっかり離れてしまっていた。

「じゃあ暑いし、うちに入ろう」

「確かに今日は暑いよな。エイコ、あがらせてもらおう」
こくり、とエイコちゃんは無言で頷いた。

「あれ？ リクオ、家の人は？」

リビングをきよろきよろと眺めながら、ソウヘイ君は言った。

「朝からお墓参りに行ってるよ」

僕はコップに麦茶を注ぎながら答えた。お盆に三つのコップを乗せると、隣で何か言いたそうに突っ立っていたエイコちゃんが横からそれを奪って行った。手伝ってくれるのならそう言ってくれればいいのに。

リビングではソウヘイ君が出窓にボンヤリと目を向けていた。サボテンの植わっている小さな鉢が一行に並べてある。お父さんの趣味だ。僕はすぐに昔そこに据えてあった水槽のことを思い出した。

金魚を飼っていたのだ。背びれが大きく欠けた金魚。夏祭りで取ったときの五倍くらいの大きさになったところで死んでしまったのだけだ。

ソウヘイ君もあの金魚を思い出しているのかもしれない。

「俺さ。転校するんだ」

麦茶を一口飲んでから、ソウヘイ君が口を切った。

「二学期からは別の学校。市外に出るから、もうリクオとも会うことは無いと思う。結構都会なんだぜ？ 一度母ちゃんが行ったんだけど、あそこってゲームセンターとかデパートとかすげえの。まあここみたいに気軽に遊べる山や川ってのは、ちょっと無いんだけだな。それで引越しは明日。寂しくなるよ、ホント」

ソウヘイ君は滔々と、まるで準備していたかのように言った。

「そっか」

沈黙が流れる。もしかするとソウヘイ君は追求を待っているのか

もしれなかったが、僕は黙っていた。窓を突き破って聞こえてくる蟬の大合唱が、今だけは鬱陶しくなかった。

「それじゃ、ゲームでもする？」

僕は二人に切り出した。

「え。でもリクオ……お前」

「大丈夫大丈夫。新しいやつ買ってもらったんだ。……ほら、コントローラー三つあるし」

僕は棚からコントローラーを取り出した。振り回したりして片手で操作ができるリモコン型の物だ。僕はそれを一つ手に取り、ペン回しのように手の上で転がして見せた。

「こう見えて僕、ゲームは結構得意なんだ」

ソウヘイ君は一瞬驚いたような顔をして、それからくつくつと笑った。

「知ってるよ」

テニスゲームに三人で没頭していると、いつの間にかオレンジ色の夕陽が部屋に差しこんできていた。ただのゲームとはいえ、これだけ体を動かしたのは久しぶりだった。向こう一ヶ月くらい運動はいいやと思うくらいヘトヘトになった。そしてある意味当然なんだろうけれど、一番上手なのはエイコちゃんだった。

「なありクオ。キャッチボールしないか？ 昔みたいに」

麦茶をガブガブ飲んでいると、ソウヘイ君がとんでもないことを言い出した。エイコちゃんも露骨に嫌そうな顔をしている。

「あのさ、分かっているとと思うけど、僕もう体が……」

「大丈夫大丈夫！」

何が大丈夫なんだろう。

三人で麦茶の入ったガラスジャグを空にして、五分ほど休憩してから僕は心ならずも倉庫にグローブとボールを取りに行った。ずっと手入れもされずに倉庫に眠っていたものだから、埃も被り放題だ

った。

「それでいいじゃん」

ソウヘイ君がそう言ったので僕らはそれらを持って夕空の下に出た。

昼間の内に熱を溜め込んだアスファルトが足元を熱くする。僕らの足は近所にある石橋の下に向かっていた。ソウヘイ君曰く、キャッチボールといえそこであるらしいのだけれど、僕としてはあまり気乗りがしなかった。その理由はソウヘイ君も分かっているだろうし、ソウヘイ君自身にも無関係ではないことなのに、どうして敢えてあの橋の下でやろうと言うのか、僕には理解できなかった。

ものの数分で僕らはそこに着いた。頭上には分厚い石橋が緩やかな弧を描いて伸びている。その真下を、つまり僕たちのすぐ横をあまり大きくない川が流れている。川を挟んで向こう側には、青々とした広葉がひしめく蓮の群生地が広がっていた。

「そーら！」

少し距離を取った位置にいるソウヘイ君が僕に向かって山なりにボールを投げた。僕はそれを素手でキャッチする。痛くはない。ゴムボールだからだ。

これはソウヘイ君からの提案だった。恐らくは僕の体を気遣ってくれてのことだろう。

「そりゃ！」

僕は思い切りゴムボールをソウヘイ君に向けて投げた。ソウヘイ君はそれをグローブでしっかりとキャッチしてから笑いだす。

「ハハハ。こりゃグローブなんていらないな」

そう言ってソウヘイ君はグローブを外した。そして今度は思い切り投げてくる。しかしその球は僕の頭上を遥か超えて何メートルか向こうでバウンドした。

「あーらら、ハハハ」

他人事のようにへらへら笑うソウヘイ君を尻目に、僕はボールを拾いに行った。

それから暫くの間、僕らはキャッチボールを続けた。時々ソウヘイ君の後ろに立っているエイコちゃんにもボールを投げた。エイコちゃんはキャッチも上手だった。

そして――

夕日が半分くらい沈んだ頃。三十分くらいキャッチボールを続けて、いい加減投げる気力も無くなってきた頃に、ソウヘイ君は突然泣き出したのだった。

ワアワアと。まるで、赤ん坊みたいに。

「え……」

混乱した。ソウヘイ君が泣いている姿など、僕は見たことがなかった。幼稚園のときだって小学校に上がってからだって一度として僕に涙を見せたことはなかったし、恐らく僕以外の友達にだって見せてはいなかっただろう。人の涙を拭いてあげている彼しか、僕のイメージにはなかった。けれど今、そんなソウヘイ君が、確かに泣いている。

どうしたらいいのか分からずに僕は右手にゴムボールを持ったまま立ち尽くした。助けを求めたかったのか、僕は無意識の内にエイコちゃんの方を見た。エイコちゃんはただ下唇を噛んで黙っていた。

「う、ぐっ……ううう」

両目をごしごしと擦るソウヘイ君に、僕は少しだけ、ゆっくりと歩み寄った。

「あ、あの。ソウヘイ君」

「……ごめん」

蚊の鳴くような声だった。

「リクオごめん。本当にごめん」

「えっと……それって、転校のことを今日まで黙ってたことを言ってるの？ そんなことくらいで別に――」

「違う！」

泣き腫らした目を一瞬だけ僕に向け、ソウヘイ君はまた顔を伏す。「あのときから今日までのこと全部だ。俺は小二のあのときからず

つと、リクオのことを避けてた。表面では仲良いフリなんかして、内心では他の奴らと同じ様に、お前に近づきたくない気持ちでいっぱいだった」

「そ、そのことだったらむしろ悪いのは僕で、だからその、全部僕の自業自得で、謝らなくちゃいけないのは僕の方で、酷いことしたのは僕の方、で」

悪いのも、恨まれるべきなのも、謝らなくてはならないのも、すべてが僕の方なんだ。だったらやっぱり忌み嫌われるのも僕であるべきなのだ。当然の四年間だった。

僕は四年前——二年生の頃に、この橋の上から川に落ちた。

群生した蓮を橋の上から眺めていると、急に景色が回転して、気付くと水の中だった。身を乗り出し過ぎたのだと思う。前日の大雨で氾濫した川の流水は僕の意識を一瞬にして奪い取った。だからそれから先のことは後になって知らされたことなのだけれど、たまたまそれを見ていたソウヘイ君のお父さんが川に飛び込んで僕を助けてくれたらしい。そしてソウヘイ君のお父さんは翌日、下流で発見された。

「僕が殺したんだ。君のお父さんを」

ソウヘイ君は大きくかぶりを振った。

「それを恨んでなんていないことはリクオも知ってるだろう。うちの母さんも、ここにいるエイコも、誰もリクオが父さんを殺したなんて思っちゃいないよ」

「……」

そうは言ってくれるけれど、現にエイコちゃんはそのとき以来僕の方を見ようとしないうし、口を利いてもくれない。僕のしたこと考えれば無理もない話だけれど。

「エイコがリクオを避けてるのだって、別に嫌ってるからじゃない」

「え？」

「その……怖いからなんだ。正直に言うと、俺もそうだった。それまでなんとも思っていない奴だったなら、きっとそれまで通り何とも

思わなかっただろうよ。けど、ずっと一緒に遊んできた奴が、ずっと一緒に笑いあってた奴が、いきなりそんなことになっちゃまって、俺は――」

ソウヘイ君はそこで一呼吸入れて、震える声で言った。

「左腕の無いリクオの姿を見るのが、怖かった」

岩肌にぶつかり意識を失い濁流に掻き回され助け出された僕は、何とか一命を取りとめたのだった。ソウヘイ君のお父さんの命と僕自身の左腕、という対価と引き換えに。腕が欠損したということに關しては、体も心も大して痛まなかった。唯一自分の腕に心残りがあるとするなら、それはソウヘイ君のお父さんの前で合わせる手が無いということだけだった。

ありがたいことにソウヘイ君の家の人たちは皆、僕のこと僕のお父さんやお母さんのことも白い目で見るようなことはしなかった。近所の人たちも優しくかった。だけどそれは左腕を失った僕に対する憐れみであつたのだと思う。これ以上救われる気なんて無かつた僕にしてみれば、その優しさはただただ余計なものだった。

そしてやはり優しい人ばかりではなかつた。先生の取り計らいのおかげで普通学校に残つた僕は、クラスでは気色悪がられ、廊下を歩けば逃げるように避けられ、ロッカーに体操服を入れておいたら左袖が切り取られていた。いらねえだろ――という書き置きつきで。何とも思わなかつたといえば嘘になるけれど、自分のしたことを考えれば、むしろこちらの方が当然といえた。

「これおいしい？」

正面からの声で僕は我に返る。

「あ、うん。……チーズが入ってるんだね」

テーブルを挟んで向こう側にはお母さんがいる。ハンバーグを咀嚼しながら何やら気難しい顔をしていた。

「そういえば今日、カトウさんのお墓参りに行ったときに、親族の

方と鉢合わせしたんだけどね——」

カトウ、とはソウヘイ君の昔の苗字だ。

「転校するらしいわよ。ソウヘイ君のご家族」

「うん。知ってる」

僕の答えにお母さんは少し意外そうな顔をした。

「今日ソウヘイ君がうちに遊びに来たんだよ。一時くらいだったかな」

お母さんは更に意外そうな顔をした。それは驚きというよりは、やや困惑の表情に近いものだった。そう感じるのも当然なのかもしれない。僕自身もソウヘイ君がうちの前にいるのを見たときは困惑したからだ。

「え。でもリクオ……ソウヘイ君って、確か今……」

「うん。車椅子だったよ。下半身が動かないんだってね。妹のエイコちゃんに押してもらって来てたみたい」

急坂をスケートボードで滑り降りる途中、失敗して腰を強く打ちつけてしまったらしい。夏休みに入る何日前にお母さんから聞いたことだ。根気よくリハビリを続ければ治るそうなのだが、それには膨大な時間がかかるとか。

だから僕はソウヘイ君の転校はある程度予期していた。僕たちの通う学校には十分なバリアフリーが整っていないからだ。きっと理由はそれだけじゃないんだろうけれど。

——俺は怖がられることが怖い——

ソウヘイ君はあの後、帰り道でそんなことを言っていた。

——両脚の自由が利かなくなった今になって、ようやくリクオの辛さがわかった。きっと俺がリクオにそうしてきたように、周りの奴らは俺を怖がるだろう。何を我がままなことと思うだろうが、俺はそれが怖いんだ。リクオ、どうしてお前はそんなに強いんだ？ どうしてそんなにも、強くいられるんだ？——

僕は何も答えなかった。言うまでもなく、僕に強さなんて無かったからだ。

三人分のコップを運ぶのにすら人の手を煩わせる。テレビゲームだって限られたものしかできないから、周りと一緒に楽しみたければ合わせてもらわなくちゃいけない。グローブだってはめられない。キャッチボールはゴムボールを使って何とかできる程度だ。人のありがたみの下で生きている僕には、自分の強さを磨くヒマなんて無い。そんなヒマがあるなら、目の前のハンバーグを片手で素早く食べられる方法を考えた方がいい。

だけど、それでも周囲からの目に怯える必要なんてないのだ。

またいつものような絡みつく暑さから僕は目を覚ました。片手で窓を開け、起き上がり、壁に掛けているカレンダーを確認する。えーっと。今日は確か――

「りくおおおおおおおおおおお！」

外から飛来してきた絶叫が僕の耳をつんざいた。

「うるせえぞシロー!」「今何時だと思ってるの? バカ?」「だってあいつ眠り深いからこれくらいじゃないとダメかって」「白雪姫でも起きるわっ」「でましたツツコミ王子」「そんなことより俺のこの海パンどう思う?」「どうでもいい」

ベランダから道路の方を見ると見慣れた顔が四つ並んでいた。今日は五人で川に涼みに出る約束をしていたのだった。

「今から着替えて出るから、ちょっと待ってて!」

気味悪がられたり、気色悪がられたり、怖がられたり、色々あったけれど、僕には少しづつ仲間ができた。今でも僕のことをそういう目で見える人はいるけれど、今持っているものがあるから気にはならない。ソウヘイ君もきつと、両脚の自由が利かないことやそれが原因で降りかかる不幸を呪うことよりも、今持っているもの、今恵まれているものに感謝することに忙しくなると思う。コミュニケーションが一種のキャッチボールだとするなら、僕らは正にそれが満足にできない。それでもゆるゆるのスローボールだったり、ジャン

プしても捕れない悪球だったりを投げるしかないのだ。
机の手紙をスポーツバッグに押し込んで、僕は部屋を出た。

(後書き)

2	2
0	0
1	1
1	1
/	/
0	0
6	1
/	/
0	3
4	1
改稿	投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5342q/>

背びれの欠けた金魚

2011年6月4日19時40分発行